

「日本語を読むための語彙量テスト」の開発

松下達彦 (東京大学教養学部)

1. 背景と目的

日本語では第二言語の語彙量の発達を調べる研究が乏しい。英語における Vocabulary Size Test (Nation & Beglar, 2007) のようなテストがないことが原因であろう。そこで本研究では「日本語を読むための語彙量テスト」(150問)を開発した。

2. 方法

「日本語を読むための語彙データベース」(松下, 2010, 2011) に基づき、語種・品詞の割合をコントロールして問題項目をサンプリングし、対象語を文脈の乏しい短文に埋め込み、語の定義を四肢から選択する形式を採用した。テストを日本、オーストラリア、ニュージーランドの大学および日本語学校生の多様なレベル・言語背景の約 270 名の学習者を対象に実施した。

3. 結果

テストはおおよそ信頼できるものであった (Rasch reliability estimate = .93) が、以下の問題点が挙げられた。

- (1) Rasch 分析の結果、測定対象能力以外の要因 (Unexplained variance in 1st contrast) が一般的許容限度を超えて 8.7 を示した。中国語系学習者と非中国語系学習者に分けて分析したところ、misfit 項目に著しい第一言語の影響が見られた。すなわち、中国語系学習者では misfit 項目は中国語知識利用の難しい漢字語か、逆に中国語知識で理解できる中上級語彙であった。第 1 言語の影響のコントロールは、単に語種を見るだけでなく、選択肢も含めた漢字の使用法を丁寧に検討する必要がある。
- (2) 問題数は現在の半数ぐらいでも十分に信頼できるテストになる。

(3) 品詞は、少なくとも読みによる基本義の理解に関しては、名詞と動詞の差がなく、副詞など一部を除きほとんど影響がないのでコントロールする必要はない。

(4) 錯乱肢の作成方法に一貫性が必要である。

5. 今後の課題

今後は、問題を改善し、20000 語以上のレベルまで測定可能な、等質な複数のバージョンのある、web やスマートフォン上で利用できるテストを開発したい。

【引用文献】

- 松下達彦 (2010) 「日本語を読むために必要な語彙とは? —書籍とインターネットの大規模コーパスに基づく語彙リストの作成—」『2010年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 松下達彦 (2011) 「日本語を読むための語彙データベース」<http://www.geocities.jp/tatsum2003/>
- Nation, P., & Beglar, D. (2007). A vocabulary size test. *The Language Teacher*, 31(7), 9-13.